

短歌表現（Ⅷ） —コミュニケーション技術における学習効果の検討—

土 永 典 明

Tanka Practice (Ⅷ) : Composing poems of daily life and nursing care

Noriaki Tsuchinaga

はじめに

短歌とは、和歌の形式の一種である。それは、五・七・五・七・七から構成される。その短歌は、五句体の歌で、遙か昔から詠まれ長い歴史を生きてきた形である。その短歌は、五・七・五・七・七の31文字から構成される。そして、この短歌は、三十一文字（みそひともじ）といわれることもある。このように短歌とは、一定の形式によって心を表現する、長い伝統をもった文芸である。そして、短歌を詠むときには、自らの作品を受け止めてくれる読者の存在を想定することが求められる。そこに言葉と他者に対する不信感の広がっている現代社会における、短歌の意義と魅力がある。初めて短歌を読む場合には、難しいことは考えず、「まずは31文字で詠んでみる」ことを心がける。そこで和歌のもつテンポやリズム等をつかみ、徐々に字余り、字足らずの短歌を詠んでいくことが好ましい。また、現代短歌において季語の有無はそれほどこだわらない。俳句では季語が必須といわれる。俳句の源流といえるほど古くからある短歌において、季語については特に縛りはない。

しかし、短歌では、31文字という不自由さをもうけ、文章としての自然さよりもリズムやテンポを優先させることで、詠み手独自の新しい表現が生まれる。その新しい表現には詩歌性ともいべき文学的なものが生まれてくる。生活の実感を大切にし、自分にとって思うがままに述べていくことが大切である。それは、自分にとっての安らぎであるばかりでなく、人と繋がっていくことを意味する。つまり、短歌を詠むことは、人間らしさを求めていくことにつながる。それは、あらゆる人に、短歌を作ることが求められていることを意味する。短歌には、万葉集以来千数百年の命脈を保っているのも、それぞれの時代に生きてきた人の人間らしさを求める思いがあつてのことである。短歌は自分の感情の高まりを表現するものである。そのため、短歌は、感動や感情を伝える抒情詩の一つなのだとされている。

I 短歌の作り方

短歌を詠むには、まず、テーマを捉えてみる。そのテーマについて詠み手がどのような感想をもったか、一文で書き留める。そして、短歌ではその一文を五・七・五・七・七の土台にしていく。多くの短歌を

鑑賞すると、誰にでも分かる状況が展開され描写されていくことが多い。その状況の描写にこそ、上の句や時として下の句の大半が費やされる。下の句では、動作の結などの落ちがあることにより、作者の思いが滲んでくるものである。したがって、テーマは起、状況説明は承、締めは転か結という要素になる。落ちには対象を描写するだけの落ちもあれば、メッセージ性のある一般的な動作による落ちもある。また、落ちには擬人法などによる仮託的な落ちや、時としてストレートな形容詞等の用言により作者自身の真情の吐露を表すことがある。体言止めの技法を用いて詠んだ短歌は、テーマが後となる場合もある。体言止めには、切れを出すことによって、テーマを強調しやすくする効果がある。短歌を詠むときには地名や人名などの固有名詞はあまり歌に読み込まないほうがよいという意見がある。しかし、地名には私的な響きがあり大きな効果をあげることがあるともいわれる。

短歌では、口語発想で、ぶっきら棒な言い方でも、詩情が適切にあればよいといわれることもある。短歌形式の伝統を踏まえつつ、形式におぼれることなく、現代の生活感情を素直に捉えるとよい。

名歌を鑑賞してみると、若い頃にはそれほどでもなかった作品が、年を重ねてみて理解できるようになることがある。そこで、本稿では筆者の作品を一首、挙げて説明してみる。

○点滴をいやがる吾子の涙顔頬よせあやす夜の更けゆきに

山上憶良の息子古日を恋う歌（万葉集巻五 九〇四）をリスペクトした作品である。古来より日本の父は普段は表に出さぬが、事ある時に奥深い愛情を発する。この歌は、親としての入院した幼い子どもの様子をふと見ての感想である。この歌には、日常のありふれた断片がきらりと光ってくることを感じさせる。短歌では、感情的に悲しいとか辛いというよりも、その感情のもとになったところを描写することによって、感情がよく伝わる。描写力とは、冷静に、感情を押さえて表現することである。しかし、そこには、散文と違って、感動そのものが根底になければならない。そしてリズムがある。作者が一番いいたいことをはっきり押さえることが簡潔につながるのである。

Ⅱ 短歌の基本を推敲

短歌ができあがれば、まずはじめに、字数を確認することが求められる。短歌を詠むとき、字余りや字足らずがあれば、体言等の表現を替えたり、強調したい部分に係り結びをとり入れたりする。それでも上手くいかない際は、同じテーマでも、別の体言からの表現を試行錯誤する。推敲とは、言葉の選び方、並べ方、リズムの取り方などを吟味して、歌の姿に整えることである。言葉を選び、姿を整えるといっても、短歌では、別に難しい規則があるわけではない。つまり、それはあいまいな表現を鮮明に、自分の心に最も適切な表現に整えて行くということである。短歌では、内容が複雑であればあるほど、感動の起伏を丁寧に読むことが涵養である。感情の起伏は、一首で詠めるものではない。それを詠むためには、複数の短歌を詠むことが求められる。大切なことはそのプロセスを詠むことで結論を言うことではない。例えば、言葉にしてみたものの、それが読者に伝わってこないとすれば、それは、歌がひとりよがりになっているということである。短歌は読者にわかりやすく詠むことを心がけることが必要である。

Ⅲ 短歌でつづる学生の日常生活

1) 介護実習

- 初日には残采目立った利用者が最終日には平らげた
(講評) 実習時の食事介助で、利用者が余り食事を摂取しなかった。しかし、実習の最後の日に、その利用者は食事を残さず食べてくれた。それが嬉しかった作者の思いを詠んだものである。
- もくもくと作業を続ける利用者の集中力と器用な手先
(講評) 障害者支援施設で実習をした作者。利用者が力を尽くして作業に励んでいる姿が、目に浮かんでくる。
- 普段なら話さぬ人が話したす不思議な力入浴介助
(講評) 無口な利用者も入浴の時には気分も爽快で、話が弾んでいた。
- また同じ会話進まず困ったが女優のように笑顔で話す
(講評) 同じ話しを繰り返す認知症の利用者がいた。その時に作者は、初めて聞いた話しのようによく笑顔で対応した。
- 利用者に私の年齢尋ねたら返ってきたの72歳
(講評) 認知症が進んでいる利用者とは話をしていたら、本人と同年に見られた作者であった。
- 佐渡おけさフロア内に流れたら利用者それぞれ独自に踊る
(講評) 輪になって踊るのではなく、それぞれの創作で踊っているのが微笑ましく感じる。
- 利用者のリハビリ頑張るその姿見守りながら元気をもらう
(講評) 高齢者のリハビリは社会復帰ではなく、日常生活の獲得に重きが置かれている。懸命にリハビリに励む利用者の姿に元気をもらった作者であった。
- 車椅子「押しましようか」と尋ねるが返ってきたのは「自分で漕ぐよ」
(講評) 実習生である学生が親切のつもりで、利用者の困っている姿を見て手助けをしようと思った。しかし、本人にとっては日常生活そのものがリハビリであった。
- 「これは何？」野菜の絵を見せ聞いてみる「キャベツ」と回答正解レタス
(講評) キャベツとレタスは似てると言えばそうなのだろう。
- 「ラーラーラー」人形かかえ歌ってる子守のようにあやし撫でる手
(講評) 認知症の利用者が子育ての頃を思い出して、人形を子供だと思ってあやしている姿が目につく。初句の擬音がいい味を醸し出している。
- 「これ誰だ？」指さす先にある写真 20歳の時のあなたの笑顔
(講評) 人生で一番輝いていた頃を人は忘れない。この利用者にとっては20歳代の青春の頃がそれにあたる。
- 「好きだよ」と顔を赤らめ話してる視線の先には男性職員
(講評) 歳を重ねても、異性に関心を示すことは衰えない利用者であった。
- あの人のコールが何度も鳴り響く「何でもねえよ」と寂しげな顔
(講評) 利用者が困った時や介助を求める時に使う介護コール。利用者と介護職員を繋いでいる命綱ともいえる。時には寂しい時にも介護コールを押す利用者がある。介護職員の顔を見るだけで寂しさが和らぐものである。
- 「美味しかった」そう言い席を離れたが「飯はまだか？」と催促される
(講評) 認知症の高齢者は時間軸を行き来している。過去の自分の世界に行ったり、現在の世界に戻っ

たりする。瞬間、瞬間を生きているといえる。

- 八月の二度目の実習特養で全く違う認知症状
 (講評) アルツハイマー型認知症の利用者は「物忘れ」に続いて、「見当識障害」も起こしやすい。見当識障害とは認知症の中核症状の1つで、時間や季節がわからなくなったり、今いる場所がわからなくなったりする。
- 孫のためリハビリ頑張る利用者に写真見せると笑顔溢れる
 (講評) 元気な姿を孫に見せたいとリハビリにも力が入る利用者。孫の写真を見るとさらに元気が出るようだ。
- 手を繋ぎ握り返すと会話する言葉はなくとも繋がる心
 (講評) 非言語的コミュニケーションで意思伝達を図っている。言語的コミュニケーションよりもむしろ精度が高いといえる。
- 片耳が聞き取りづらい利用者に伝えられない自分の気持ち
 (講評) 難聴の利用者に対するコミュニケーションに苦慮する作者。
- 晴れの日にはしゃぼん玉吹き利用者とうっとり眺める虹の泡
 (講評) シャボン液をストローに浸け、口から細管内に呼気を吹き送りシャボン液の球体を作り、シャボン玉を空に向かって吹き上げる。幾つになっても、いつ見ても心がワクワクする。
- 自分からかける言葉が見つからずあたふたしてた午前の時間
 (講評) 実習の初日はまだ施設や利用者に慣れず、あたふたと時間が過ぎていった作者であった。
- 利用者と会話をすると思い出す地元のことや自然の空気
 (講評) 実習をしていて感じるのは、利用者から多くのことを学んでいるということである。また、利用者と話すことで思い出したり気付かされたりするものである。
- 照れながら「この歳で手を繋ぐとは」夫婦の会話心が和む
 (講評) 夫婦で特別養護老人ホームに入所している利用者もいる。天気の良い日は二人で園庭を散歩したりする。久しぶりに手をつなぎ二人で歩くその先には、綺麗な庭園が広がっている。

2) 日常生活

- 宵の刻凜と密かに顔を出す待てど暮らせど来ぬ人思ふ
 (講評) 夜の静寂の中でひっそりと咲く月見草。上品な印象を醸し出す。
- 富士山の麓に咲けり月見草月明かりの下白き花咲く
 (講評) 富士山によく似合う月見草。夕暮れを待って咲き、朝日を浴びてしぼんでいく。
- 月光に照らされ揺れる月見草今宵限りの儂い命
 (講評) 今宵はスポットライトを浴びて主役となる月見草。下句で儂さを表現した。
- 月を待つ白き花びら身にまといドレス姿の君は寂しげ
 (講評) 上句と下句の繋がりや表現がよい。
- 白き花散りゆく朝の儂さよ朝霧に濡れキラリ輝く
 (講評) 写実的な表現で、キラリの擬態語が生きている。
- 月見草夜道に人目を避けるよう月と一緒に白く輝く
 (講評) 人目を避けてそっとたたずむ姿に目を見張る。
- 道端にそっとたたずむ白い花月に照らされ星空のよう
 (講評) 謙虚で凜とした姿が月に映えている。

- 月明かり照らされ輝く白い花 美しく咲き今日も儂く
(講評) 月明かりに照らされライトアップされた月見草の姿。しかし、日中には元気がなくしぼんでしまっている。
- あなたにと庭先で摘む月見草ほのかな恋はこの花の意味
(講評) 月見草を見て花言葉を思い出した作者であった。
- 草原にぼつんと映える月見草雨にうたれる一輪の花
(講評) 孤独に耐えかねて咲いているように見えた月見草。雨に打たれて力なくたたずんでいる。
- 夜会ってお疲れ様と僕に言う「ああ君の名は月見草なり」
(講評) 作者はクラブ活動で帰宅する時に、学校の園庭に咲いている月見草に目をやった。夜に見る月見草は凜とした佇まいをしていた。
- 月見草見て思い出す祖母の顔この花好きで育てていたね
(講評) 今は亡き祖母が丹精込めて育てていた月見草。その月見草を見るたびに、まぶたに浮かぶ大好きな作者の祖母の顔であった。
- 部屋の隅積み上げる本見てもなお読みきる前にまた積み上げる
(講評) 読みたい本を買うたびに、それまでに読もうと思ってもなかなか減っていかない未読の書籍がたまっていく。
- 無音から仲間と共に作り上げ重なる音は軽音楽
(講評) 軽音のクラブに所属する作者が、グループのメンバーと音を合わせる。心に響く音の重なり。
- 自転車が壊れた後に皿も割れイライラしてた実習前日
(講評) 実習前日で気分が高まっていた作者で、そんな時に限って自転車のチェーンは切れるし、料理の皿も割れてしまった。
- 朝八時バスに乗り込む同じ靴今日も一日元気をもらう
(講評) いつも乗車する朝のバスには、毎朝同じ人が乗っていることが多く、勝手に親近感をもっている作者。毎朝頑張って通勤通学している人を見て、「みんな今日も頑張れ、私も頑張ろう」という気持ちになる作者であった。
- 先輩のギター憧れ始めても埋まることない四年の歲月
(講評) ギタリストの先輩に憧れてエレキギターを始めた作者。なかなか先輩に追いつけないが、日々の練習で何とかライブに参加できるようになった。
- 久々に会った友達大人びてだけど話すと昔と変わらず
(講評) 関東の大学に進学した友達に久々に会った作者。化粧や服のセンスなど都会ナイズされた友達の姿であったが、暫く話すともう新潟人になっていた。
- 学校に行くとみんなが待っている「お早う」の声聞けて幸せ
(講評) 雨の日や風の吹く日も、雪の降る日でも学校へ行けば必ず作者を待っているクラスメイトたち。自分は一人ではないんだと気付くひと時であった。

ま と め

短歌を作ってみたいと思ったこと、それが何より大切である。それは、短歌をつくることに価値があるか、ということ我问うことから始めるものではない。短歌を詠むこと自体が大切なのであり、意義のあることなのである。人間が生きていること自体が大切であるように、短歌とは、人生そのもの人間そのものなのである。生活の実感を大切にし、自分の思うがままを述べていくことは、自分にとっての安らぎであるばかりでなく、人と繋がっていく。短歌を作る意味とは、人間らしさを求めていくことにつながる。自分の外側は写真で写すことができる。しかし、その写真は内面までをも描くことはできない。それだけに短歌は一人ひとりにとって大切なものである。二つとないその人らしさや、その瞬間を残しておきたいと思うことは、人として、当然の要求であると筆者は考える。人間らしさを求めるがゆえに短歌なのである。したがって、手間暇かけて短歌を作ることに意味がある。短歌を作っていくということは、単に趣味的なことなのではなく、その人の生き方を支えていくものである。人間と言うのは、人と繋がりつつ、孤独なものを支えて生きている。ただ、それを歌うことで、寂しい時も生きる意欲や張りを与えてくれる。我々が折に触れて短歌を作ろうという思いになる根底には、日本語そのものの特色が生きている。単に鑑賞するというだけでなく、実作していくことが重要である。

参考文献

- 1) 永田和宏 2013 近代秀歌. 岩波新書.
- 2) 『短歌』編集部編 2012 決定版 短歌入門. 角川学芸出版.